文化財だより

第 28 号
平成28年３月
発行　真鶴町教育委員会

特集　真鶴に伝わる伝承・民話
～後世に語り継ぐ～（二）

私たちの郷土にはりっぱな歴史があります。その歴史を支えてきた人々にも様々な生活文化がありました。

真鶴町では、昭和三十七年に平井大海氏をはじめとする有志の皆さまにより、郷土の昔の姿を明らかにし、埋もれている文献に残された先人の想いを後世へ残していきたいという目的のもと、「郷土の歴史を学ぶ会」が結成されました。この会は、昭和三十八年に「郷土史研究会」、昭和四十二年には「真鶴町郷土を知る会」と名称を変え、郷土の文化の探究と保存が行なわれてきました。

そして、会員の方々が真鶴の歴史の流れと先人の足跡を探究し、その成果を『真鶴』という機関誌に発表されてきました。

今回の文化財だよりでは、昨年度、焦点を当てて特集した【伝承・民話】を引き続き取り上げ、町民の皆さまに紹介することとしました。

ここに、「真鶴町郷土を知る会」において永きにわたりご活動・ご尽力いただきました会員の皆さまへ深く感謝申し上げますとともに、今回発行しました『文化財だより』が町民の皆さまに活用され、真鶴に生きる人々へ語り継がれていきますことを祈念しまして本号発行の挨拶とさせていただきます。

真鶴町教育委員会

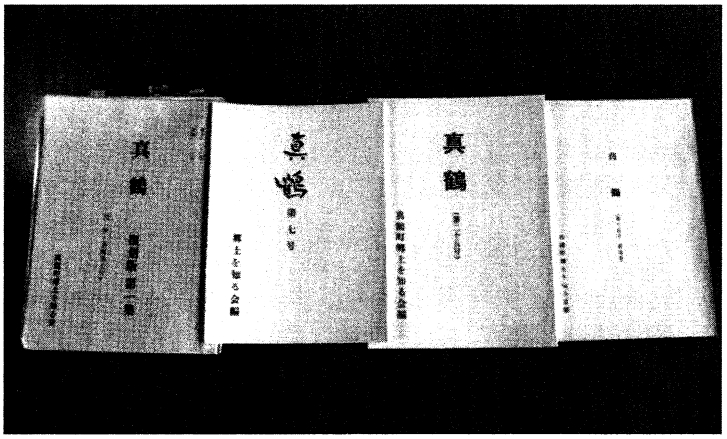
目　次

特集
真鶴に伝わる伝承・民話
～後世に語り継ぐ～（二）……2
「山野の遊びと
キツネと信仰」……3
「真鶴音頭の
由来と作者」……5
「道祖神と
昔の子ども達」……6
『えびす講』
夜のにぎわい」……6
「箱根山の
あまのじゃく」……8
平成二十七年度文化財
保護事業……8

「真鶴町郷土を知る会」により発行された機関誌『真鶴』及び「真鶴町郷土を知る会」による調査・研究をもとに作成・編集され、真鶴町報へ掲載されていた『新・真鶴風土記』の記事の一部を掲載しております。

文章は小学生にも読みやすいよう、ふりがなをふり、文字の大きさを今までよりも大きくしております。

また、個人情報に関係する文言や個人名、言葉づかい、さらに当時の町の様子と現在の町の様子の違いなどを踏まえ、一部を再編集して掲載しております。原文をご覧になりたい方は真鶴町教育委員会までお問い合わせ下さい。



～「真鶴町郷土を知る会」により発行された機関紙『真鶴』～

「山野の遊びとキツネと信仰」

原文　三木　二郎

（出典：『新・真鶴風土記』）

「山遊びに行ったら、お昼の弁当を使うとき、必ず食べる前に少しつまんで捨てるんだよ」と、幼い時から母に聞かされていた。ごちそうをねらってキツネがついてくるから、おすそ分けをしてやる―キツネがつくという信仰は、むかしから信じられていた。信じる信じないは別として、弁当包みを開くと、そっと捨てたのも、こども心にいささか気味悪さを感じたからである。

そもそも、お稲荷さんの使い、信仰の使者とみなされるキツネが、山遊びのおりの悪ものになるのはいささか可哀そうである。むかしの人がキツネを神そのものとして拝していた末路がこうなったのであろう。人智の進歩のため信仰がうすれ、このような民俗的な風習だけが残されたものだろう。

万葉集の「家にあれば笥に盛る飯も草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」は、旅するとき神に祈りささげる食事も、家のような食器に盛れないので椎の葉で間に合わせるという意味にとるべきで、神をおそれるこの時代の信仰を忘れると、歌の真意が読みとれなくなる。

春の好季節、人びとの心は野山や磯辺の遊びにと向かう。真鶴では、む

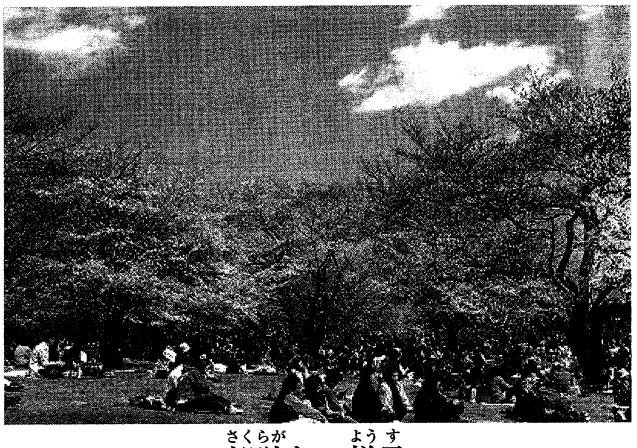
かし四月十七日を山遊びと称して、大平山で一日ゆっくりと遊ばせてくれた。ボケの花が日だまりに咲き、ウドが木かげで芽を出す季節は楽しかった。この季節に山や海で食事をする風習は全国的なもので、三月三日、四月八日は特に多いようだ。野がけとか磯遊びといい、静岡市では浜ゆきといって一日を楽しく遊ぶ行事であった。

奈良県の一部では三月三日に岡に登って飲食をし、花見といっているらしいが、同じ風習が岡山県にもある。山の花をかざして持ち帰り、家にかざるとは花見の祖流をみるようなみやびを感じる。

町内の道路に長蛇をつくる外来者の車の列をみると、遊びの考え方が急速に変わっていくことがわかる。健康な遊びは、やはり家族を主体としたピクニック、そこに野山があり海があるといったむかしながらの遊びに本来の姿があると思う。

よろい着た人にもあはずさくら狩り　松十

※①松十…夜琴亭松十。岩出身の俳人。松尾芭蕉の弟子。



桜狩りの様子

「真鶴音頭の由来と作者」

原文　御守　平作

（出典：『真鶴　第一号』）

昔から真鶴に伝わる歌は西念寺の松の木とか、発心寺の前の白椿、それに大漁ぶし、また風外さんを慕って雨コンコンとかだけしかなかった。昭和のはじめ各地で新しく小唄や音頭が流行し、真鶴でも何か新しい歌をと望む人が多かった。時の町長松本赴氏は昭和九年四月一日築港完成記念に立派な真鶴音頭を作成したいと決意して先ず小田原に住む大衆詩人福田正夫氏に作詞を依頼した。

福田氏は真鶴の風光のすばらしいこと、人情の素朴なことに心を打たれ永遠の生命を保つ立派な俗謡真鶴音頭を作詞すべく快諾した。また松本町長は県庁にいた流行作家栗原氏にも助力を求めた。

従って歌の中には松本氏の詩作もあれば栗原氏の意見もあり、何回か訂正もされ苦心して三月はじめ完成した。作曲の大村能章氏は当地に出張まで して教えてくれた。練習場所は当時の港湯の二階で今の町立診療所。女子青年十名ばかりと旅館で仲居さん、役場の職員も交えて毎夜猛練習をした。踊りはコロンビアから河野達郎氏が来て教えた。ようやく踊り方も揃ってきたし楢原呉服店から揃いの浴衣も出来て踊りも花が咲いたようになり四月一日を待った。

同日は町を挙げての大祝賀気分、小学校の旗行列もはじまり空には日航機が飛んで来て宙返りの妙技を見せてくれたりしたが、あいにくの雨となり魚市場では踊れず、小学校講堂は祝賀会場で大臣県知事その他知名の来賓多数参列しての大祝賀行事をおえ宴会場の湯河原へ引揚げたあとで一同初公演して見物人の大喝采を受けた。コロンビアへ頼んでおいたレコードもできてきた。歌手は有名な赤坂小梅と伊藤久雄、山田和香の三人である。町内では青年や娘達も踊り出しやがて老若男女大勢揃って踊るようになった。五月には放送局からラジオ放送もした。湯河原、熱海へも出て宣伝、鎌倉で開かれた県下音頭大会ではアマチュアとしては巧いものだと賞讃され、ますます人気が出た。かくて真鶴音頭は民謡として地方舞踊としても模範的なものになったものだった。

ただ当時の歌詞にくらべ町の状況が変わってきたのもやむを得ない。折角先任者が苦心して作ったものであり他地方の音頭にくらべすばらしいわが真鶴音頭をあきずに踊りつづけ、そして後世まで残してもらいたいものである。

現在の真鶴音頭の様子

※②町立診療所…旧診療所。現在の情報センターが建っている場所にあった。

「道祖神と昔の子ども達」

原文　桜井　光夫

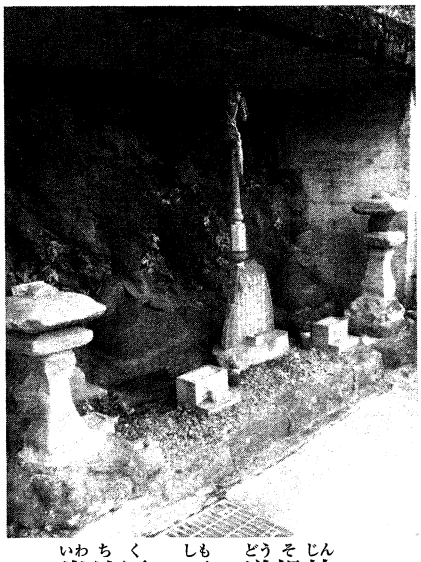
（出典：『真鶴　第一号』）

塞の神さんは一月十四、五日である。子どもにとっては楽しい年中行事の一つである。

十一月になると一年の生活もおわりに近く、子どもたちは学校から帰ると山に竹をとりに行く。師走もおしつまると浜にドンドン焼きの支度にかかる。各集落でそれぞれの趣向で飾りたてるのだが、子どもの対抗意識はこのころ養成されるのだろう。

正月の門松や「お飾り」の取りあいは子どもの団結力と権力指導性の力闘の養成になる。オンベ宿は寝ずの番で活動する。小正月は十五日正月ともいうが、道祖神のお祭りである。山車はきれいに飾られ、太鼓叩きの競争だ。資金集めは余興まじりで各家をまわって行う。「おめでとう」にはじまり神棚の下で唄って踊って「一文くだっせ」となる。そのほか「鶴は千年、亀は万年、浦島太郎は八千年、舞いこんだ舞いこんだ、福の神が舞いこんだ」など縁起のよい文句で金集めも盛大なことを考えたものだ。

話はかわるが、私たちが子どものとき、漁場の親方に頼まれたものかどうか、その辺は少しわからないが、岩の青貫商店下の道祖神の前に並んで、六年生までが「南無塞の神さん、ブリがとれるように拝みます、頼みます」と手を合わせ大声を張りあげてやったものだった。これは漁船の出るころをみはからって拝んだものだが、私が六年生でオンベの大将のときには、防波堤の先端に立って、網の船をみながら大声で拝んだものだった。ブリがとれれば当然の代償のように獲物を要求し、それを魚商に売ってノートや鉛筆を買って分け、家計の一助にもしたが、菓子に化けたこともあった。しかしブリがとれすぎると、もらったブリに買手がつかず困りはてているのを、買いたたかれたりしたものだ。



岩地区～下の道祖神～

※③オンベ宿…こどもたちの活動を世話する大人の家。宿は固定していた。

「『えびす講』夜のにぎわい」

原文　三木　二郎

（出典：『新・真鶴風土記』）

西風がつのり、ミカンの色づくころえびす講がやってくる。えびす講とはデパートやスーパーマーケットの大売出しのキャッチフレーズと心得る若い主婦の多いのには驚かされる。

むかし風の家でも十月二十日のこの行事がなくなったようだが、この夜のご馳走は赤飯をたき、おひらにはニンジン、ゴボウ、サトイモ、ダイコン、ハス、焼豆腐、コンブ、サンマなどの煮〆が三百万円で、額は高いほど縁起がよいといわれ、気の弱い者は叱られるほど。父は大黒そろばんをパチパチと景気づけ、にぎやかな家族のまどいが幸せの実感となる。

えびす講は、わが国の民間信仰においては、生業を守り福利をもたらすエビス神への感謝と祈念からはじまったといわれるが、異国の人を意味するエビスということばと別に考えることはできない。異郷から来た神への尊崇は、商家と農漁家とはちがうとはいうものの、真鶴では商家風の伝統がまさっているようだ。

エビス様の像

「箱根山のあまのじゃく」

真鶴町観光ボランティアガイドのお話

むかしむかし、箱根の山に、うっかり天から落ってこちてきた、あまのじゃくという者が住んでいました。あまのじゃくは大変な力持ちでしたが、不思議な事に、力が出るのは日が暮れてからの夜だけでした。ある晴れた日、あまのじゃくは箱根の山のてっぺんに立って、まわりをグルリと見わたしていました。

「おう、今日はとおくの山までよく見えるのう。だが、わしの箱根山が一番いい山じゃ。」

あまのじゃくはご機嫌でしたが、ふと西の方をながめると、さっと顔色が変わりました。箱根山の西の雲の間からは、日本一の富士山が、その美しい姿をのぞかせていたのです。「ううむ、富士は

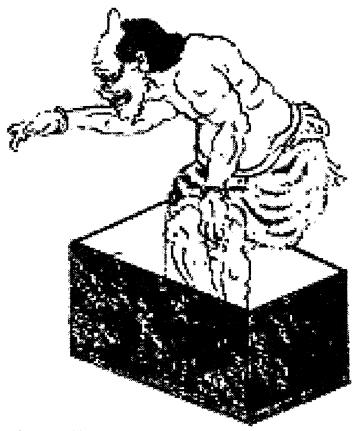
やはりきれいな山じゃのう。背丈も高くて、人々が朝に夕に合わせる気持ちもわかるわい。」あまのじゃくは、ウットリと富士山を眺めていましたが、くやしそうに言いました。

「だめだ、だめだ！富士山がいるおかげで、わしの箱根山の美しさがかすんでしまう。人間どもは箱根に尻を向けて富士ばかり見ておる。なんとかしなくては…」あまのじゃくはしばらく腕を組んで考えていましたが、やがていいことを思いつきました。それは、なんと富士山のてっぺんの岩を海へ投げ捨ててしまい、その背丈を低くしてやろうというのです。その夜、人々が寝静まってから、あまのじゃくはもっこ（土を運ぶ道具）をかついで、エッチラオッチラと富士山に登りました。そして、てっぺんの岩をつかむと、もっこに入れて富士山を下り、海岸から海にめがけて投げ込みました。あまのじゃくは、それからも毎晩富士山に出かけては、てっぺんの岩を海に投げ込みました。

あまのじゃくがあんまりたくさんの岩を投げ込んだので、海にはいくつもの島ができました。それが、「大島」「新島」「式根島」「神津島」「三宅島」「御蔵島」の伊豆七島なのです。そして、投げそこなって、近くに落ちたのが、「初島」になったということです。

しかし、これだけの岩をとられても、富士山の背丈は、まだまだ日本一です。「くそー！今夜は思い切りたくさんの岩を運んでやる！」あまのじゃくは、その晩も富士山に出かけて行きました。この夜は、いつもより大きな岩をはがしたので、時間がかかってしまいました。そして、富士山を下りて箱根あたりを通りかかったところで、一番鳥が「コケコッコー」と鳴きました。「しまった。夜が明けてしまっては、わしの力がなくなってしまう。」あまのじゃくは、もっこの中の岩をぶちまけると、急いで箱根の山に逃げ帰りました。

その日、おてんとうさまが高く上ると、箱根の山の下に、おわんをふせたような形の山が二つ



江戸時代に描かれたあまのじゃく

きていました。

これが、あまのじゃくが逃げた時にぶんなげた岩で、今も「二子山」と呼ばれている山なのです。さて、あまのじゃくですが、これにこりたのか、もう二度と富士山には行かなかったということです。

・・・ここでお話は終わりですが、真鶴に伝わっている伝承には続きがあります。このあまのじゃくのもっこには三つの小さな石が残っていました。

あまのじゃくは几帳面だったのでしょうか、これも海に投げ捨てました。その投げた三つの石が、真鶴半島の三ツ石となった、と伝えられています。

『箱根山のあまのじゃく』は、内容の異なる伝承が幾つか存在しております。当紙面に掲載されているお話は、県西地区に伝わる民話をもとに、真鶴町観光ボランティアガイドの方々が町の案内を行なう際にお話しされるエピソードを編集したものです。

県内視察報告

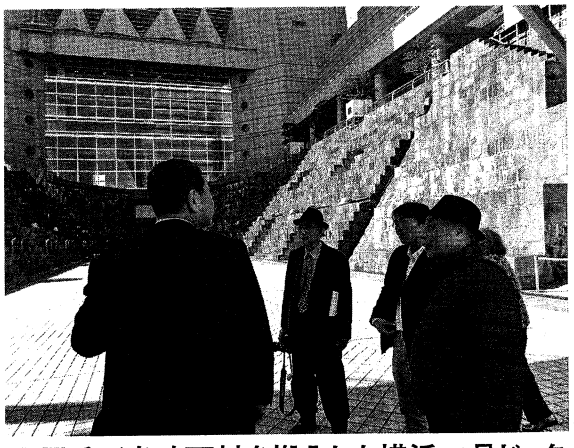
平成二十八年二月年十九日

・神奈川県立歴史博物館
・横浜開港資料館
・日本郵船博物館

土屋大次郎氏寄贈資料～石展目録より～

神奈川県立歴史博物館にて、二月六日から三月二十七日まで、「石展―かながわの歴史を彩った石の文化―」という企画展が開催され、真鶴町からも土屋家寄贈資料や教育委員会所蔵の古文書などを同館へ貸出し、展示されました。今年度の視察では、展示活動における資料の活用の方法を学ぶとともに、神奈川県の石材史について勉強してきました。

今回の視察で得た知識や情報等を今後の町文化財普及活動に活かしていきます。



土屋氏が当時石材を搬入した横浜二号ドック

平成二十七年度文化財保護事業

◎文化財広報啓発事業

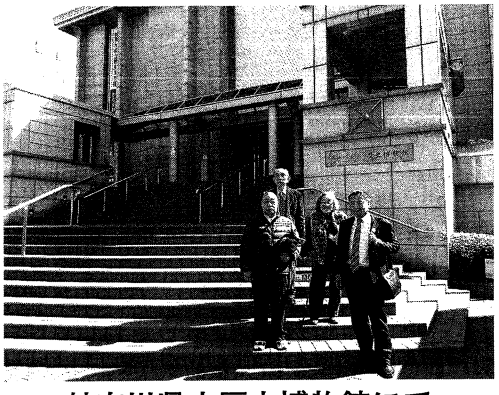
- 文化財だより第二十八号発行
- 町民センター・民俗資料館展示事業
  各施設での企画展示を実施

◎文化財審議委員調査研究事業

平成二十八年二月十九日
横浜市への視察研修を実施

◎文化財審議委員協力事業

- 教養講座くすのきゼミ講師
  小野間　松男　委員
  十一月十三日　開催
  『江戸城築城と真鶴（相豆）の採石』



神奈川県立歴史博物館にて